
memory ~ 失われた記憶 ~

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

memory失われた記憶

【Nコード】

N2881BA

【作者名】

空

【あらすじ】

福引きで当てた日間賀島の旅行券。

その券が引き起こした悲しい事件。

そして、失われた記憶。

果たして、事件は解決するのか、失われた記憶は戻るのか。

空です（＊＾ー＾＊）

初めての小説なので、上手く書けるかどうかは分かりませんが、精一杯書いていきます。あらずじだけを見ると、哀しい感じがしてしまいかもしれませんが、最後はハッピーエンドにしたいと思っています。カップリングについては、基本的には原作どおりです。（新蘭、平和、真園、光哀e t c .）出来れば、三日に一話くらいのペースで書いていきたいと思っています。ご感想やメッセージを頂けると、励みにも参考にもなります。

よろしく願います（＜ー＞）ゞ

file1:誘い(前書き)

名探偵コナンの二次創作です。

名探偵コナンを知らない方も楽しめるような小説にしていきます！

では、ご覧あれ(*・・・)

file 1: 誘い

どうしてこんなことになっちゃったんだろう。

暗闇の中、私は後悔していた。福引きで団体旅行を当ててしまったことを。皆を、新一を、旅行に誘ったことを

二週間前

「ねえ、新一」

「ん？」

「あのね……話が、あるんだけど」

入学の準備をするために新一の家へ行った帰り道、賑やかな商店街を抜け少し落ち着いた道に出たとき、私は隣で一緒に歩く高校生探偵（いや、卒業した今は新大学生探偵とも呼ぶべきであろうか）である彼氏 工藤新一に話を切り出した。

「なんだよ？」

「じゃーんっ！ 見て、これ。日間賀島の旅行券！」

新一の反応を伺う。

「日間賀島？ 愛知県か……いーじゃねーか！ 行ってこいよ。どーせ、おっちゃんとおばさんの家族三人で行くんたる？」

「……もういい。新一に見せた私がバカだったわ」

「？ 何で怒るんだよ？」

何の興味も示さない新一に、私はがっかりした。そして、怒りがこみ上げてくる。

「せっかく誘ったのに……」

「あー、俺は止めとくよ。面倒くせー」

「サイッテー！ もーいい、園子と和葉ちゃんと行くからっ！」

「お、おいつ、待てよ、蘭っ!!」

走って帰ったせいか、汗が首筋を伝う。

「寒っ……三月になったからって、まだ寒さが残るわね」

探偵事務所への階段を上がり、ドアノブに手を伸ばして、止めた。

(……ちよつと散歩でもしようかな……家に帰る気分じゃないし……

…園子、暇かな……)

携帯を取り出し、電話帳を開く。そして、親友である鈴木園子に電話をかけた。

『もしもし、蘭?』

「あ、園子? 今、暇してたりしない?」

園子が何か言い出さない内に誘う。そうでないと、またいつものように長電話になってしまう。

『え、あ、ひ、暇だけど? 何、何かあるの?』

「別に……ただ、家に帰る気分じゃなくて……一人でいるのも嫌だったから……」

『旦那と過ごせばいいじゃない!』

「嫌よっ!!」

『え……?』

「喫茶店ポアロに来て。席で待ってるから。梓ちゃんに聞けば、席は分かると思う」

そう伝えると、私はすぐさま電話を切った。そして、階段を下がり、ポアロへと入った。

園子が喫茶店へ入ってきたとき、自分が何をしていたのかも分からないくらいもの思いにふけていたことに、初めて気づかされた。

file 1：誘い（後書き）

初めまして、空です。

工藤新一・新大学一年生。探偵。

毛利蘭・新大学一年生。新一の恋人。幼なじみ。

鈴木園子・新大学一年生。鈴木財閥のご令嬢。蘭の親友。

file 1は蘭ちゃん目線です。そして、季節はというと、卒業式が終わり、まだ寒さの残る三月です。

今回は「file 1/5・嘘と真実」「file 2・喫茶店」です。file 1/5は、本編とはあまり関係ないのですが、工藤新一と江戸川コナンについて、新一君が蘭ちゃんに話す、という回想シーンです。蘭ちゃんがもの思いにふけていた、その内容です。file 2は、蘭ちゃんと園子ちゃんが

file 1・5：嘘と真実

『蘭、話がある』

新一から電話がきた。どんな話なのか、気になる。けれど、それと同時に何故だか少し、怖い気もする。

『七時に……家に来てくんねーか？』

電話が切れると、すぐに制服から私服へと着替えた。今は五時半、ついさつき、新一に送ってもらったばかりだった。

どんな話なのか　何となく想像がついていたりする。今まで散々誤魔化されてきたけど、探偵でなくても、流石に気がついていた。

コナン君が新一なのではないかと。

時計の針が六時半を指した。

「お父さん！　今日、新一と一緒にご飯食べてくるからね。ちゃんとご飯食べといてよ？」

「ああ、分かってるよ、さっさと行ってこい！」

怒ってる雰囲気は伝わる。早く行かなければ。

門の前まで行くと、新一が外で待っていた。

「新一っ！」

「蘭……」

「……まだ、七時前だね。あ、そうだっ！　夕ご飯作ってもいい？」

「……いーけどよ……その前に、話、してもいいーか？」

「う、うん」

「とりあえず、家入れよ。寒いだろ？」

新一が玄関まで案内をしてくれた。小さいころから見慣れたその景色は、今も変わることはなく、思い出たたちを美しいままに残している。なんだか、懐かしく思えてくる。

「暖房、付けといたから、暖かいだろ？」

新一の声には、どこか落ち着かない様子が出ていた。「ありがとう」と一言伝えると、そのまま会話も無いままリビングへと歩き続けた。

リビングのテーブルに、二人で腰掛けた。

「……それで、話って？」

切り出してみた。

「ああ……。俺、実は…… 江戸川コナン、だったんだ」

「……」

新一が言うには、新一はある組織が作った妙薬を飲んだせいで幼児化してしまい、江戸川コナンと名乗った。そして、やっと組織を倒すことが出来、元の姿に戻ることが出来た、そうだ。

「……私、何度か疑ったこと、あったよね」

「ああ…… あん時は焦った」

「どうして、言って、くれなかったの？ 協力、できたかもしれないのに……！」

「……悪い。オメーを、不安にさせたくなかった…… 巻き込みたくなかった…… 守りたかったんだ。だから」

「哀ちゃんもっ！ …… 哀ちゃんも、新一と同じなんですよ？」

しばらく、沈黙が続いた。

「……何で、分かった？」

「何となく、雰囲気で…… だって、コナン君と哀ちゃんだけ、雰囲気が違うってたから……」

「そっか……」

また、沈黙が続いた。

「…… 哀ちゃんはどうしてるの？」

「アイツは」

哀ちゃんのことを教えてくれた。組織に関わっていたこと、逃げ出したくて妙薬を飲んだこと、そして

「もう一度、今度は、灰原哀として、やり直すって言ってた」

「そう、なんだ……」

頭の中が整理つかなくなってきた。新一がコナン君なのは想像してた。けれど、哀ちゃんまで関わっていたことは、初耳だった。新一の話は分かりやすいけど、話自体が難しかった。

五分が経った。だいぶ、整理がついた。組織のことも、今までのコナン君としての新一の態度、行動についても。

「……新一……ううん、コナン君」

「……」

新一を見た。新一は黙って私の目を見つめた。すると、ポケットから何かを取り出した。

「……なあに、蘭姉ちゃん」

それは、新一の話の中に出てきた、蝶ネクタイ型変声機だった。いつも、コナン君が付けていたものだった。

「いつも、いつもいつも……私を守ってくれて、ありがとう……」

「……」

「……ううん、僕の方こそ、いろいろ迷惑かけたりして、ごめんね。見守ってくれて、ありがとう」

そう言うのと、新一は変声機をポケットにしまった。そして、真剣な目つきでこちらを見る。

「そして……これからは　俺が、工藤新一が毛利蘭を守る」

「……し、新一」

突然の宣言に、戸惑う。

「イギリスで、ちゃんと言えなかったからな……」

「え……？」

そして、何かを決意したかのように次の言葉を口に出した。その瞬間、嬉しすぎて　涙が止まらなかった。

「世界中の誰よりも、蘭が好きだ。もう、離れたりしねー。これからはずっと、ずっと　一緒にいよう」

コナン君のつき続けた嘘、新一が教えてくれた真実。その嘘と真実は、どちらも私や皆を守るためのものだった。そんな新一を、今度は自分が守りたい。ずっと一緒にいたい、そう思った。

「あの時は嬉しかったな……。ずっと、一緒にいようって、言ってくれたじゃない。なのに、何でっ!？」

その時だった。園子が入ってきた。

「ら、蘭っ？ どーしたの？」

「えっ、あ、園子っ！」

「さては、旦那と何かあったな？」

「……」

私は園子に不満をぶつけてしまった。

file 1・5：嘘と真実（後書き）

空です（*^ー^*）

蘭ちゃん目線です。

シリアスっぱさを出したかったのですが……難しいですねー、やっぱり。

次回は喫茶店での会話です！

file 2：喫茶店

「あの時は嬉しかったな……。ずっと、一緒にいようって、言ってくれたじゃない。なのに、何でっ!？」

喫茶店に入ると、レジのすぐ近くに蘭がいた。けれど、例え蘭の姿が見えなかったとしても、今の大声で気づいただろう。

「ら、蘭っ？ どーしたの？」

とりあえず、何があったのか、聞いてみた。

「えっ、あ、園子っ!」

私を見て驚く蘭の表情には、何か不安を抱えている様子が伺えた。

「さては、旦那と何かあったな？」

「……」

分かりやすい。

「あのね、実は」

蘭が新一君に日間賀島の旅行券を見せ、その反応が、

「俺は止めとくー!？ 何それ、旦那として、サイテーじゃないっ

！ せっかく蘭が二人きりで過ごしたいからって誘ったのに!」

「あの、そこまでは言っていないんですけど……」

「同じよ!」

何でアヤツは断るのかね……。まあ、一応、旅行券を確認しますか。

「蘭。その旅行券、今持ってる？」

「え、ああ、あるよ!」

なるほど、確かに日間賀島の旅行券だ。ツアー形式になっていて、いろんな体験をすることが出来て、ホテルも豪華

「って、このホテル、鈴木財閥の経営してるホテルじゃないっ!」

「えっ、うそー!？」

「ホントよっ! あ、蘭、この券、二人じゃ行けないわよ」

気づいてしまった。人数制限に。

「四人から十人つて、書いてある。少なくとも多くてもダメみたい」
「えー！？ そんな……」

「……じゃあ、服部君と和葉ちゃん、真さんと私の、六人で行くつていうのは、どう？」

「チャンスは見逃しちゃ、ダメよね。ホテルは鈴木財閥が経営してるし、真さんと会いたいし、服部君と和葉ちゃんをくっ付けたいし。あ

「そういえば、服部君と和葉ちゃん、付き合ってるの？」

「……まだ、みたいだけど……」

「そっか（愛のラブラブ大作戦、開始ねっ！） で、どうする？」

「うーん……聞いてみないと……」

「じゃあ、三人に聞いてみてよ！ 私は真さんに聞いてみるわ」

「え、そんな、急にっ？」

「早くしないと、予定が埋まっちゃうかもしれないでしょー？ いい、今週中に聞いといてよね！」

蘭に最終確認をして、私たちは喫茶店を出た。

帰りながら、真さんにどうやって聞こうか考えていた。せつかく聞くなら、何か仕掛けたい。

「はあー……いいなあ、蘭は。新一君と付き合えて。新一君が戻ってきたとき、すっごい嬉しそうだったからなあー。 てか、何で新一君、一つの事件解決するのに、かなりかかったんだろ？ 頭良いのに。 蘭は、事件のこと、詳しく知ってるみたいけど……あと、コナン君、あのガキンちゃんが消えたのも気になるわね」
「考えているうちに、あることに気がついた。」

「そういえば、コナン君が消えた二、三日後に、新一君が現れたわね……」

そして、一つのキーワードが浮かび上がった。

「……同一人物……？ はは……んなわけないわよね。考えるの止めよう」

馬鹿げたことを考えるのは止めて、真さんにどうやって伝えるかを

再び考え始めた。

その頃、新一は……

「ヘックシ……また、誰かが俺の噂してるみてーだな……」

file2:喫茶店(後書き)

空です(*・・・)

file2は園子目線で書きました。

いかがですかね？

今回は、蘭ちゃんと和葉ちゃんの、電話での会話を書こうかな、と
(^。^;))

では、file3もよろしく願いします

file 3：西への電話

宿題をしとつたら、携帯が鳴った。

「誰や、宿題やつとんのに」

アタシは相手を確認すると、すぐに通話ボタンを押した。

「蘭ちゃんっ!？」

「あ、和葉ちゃん？」

「ひさしぶりー! どないしたん? 工藤君と何かあったん？」

「えっ!？」

工藤君が十二月に戻ってきたことは、平次からも蘭ちゃんからも聞いた。何や、事件のこと、詳しくは話されへん言われたけど、とりあえず、解決したっちゆうことは聞いた。

「まだ、恋人になつて3ヶ月やん。喧嘩でも、したん？」

「ちよつ、ちよつと待つてよ! 喧嘩は、してないんだけど……」

蘭ちゃんは日間賀島の旅行券についての経緯を話し始めた。

「へー、何で工藤君、行かれへんのやろ? せつかく蘭ちゃんが誘つたのに……」

「でしょ? それで、園子に不満をぶつけたら……」

今度は、旅行券の人数制限について、そしてそれに対する園子ちゃんの意見を話してくれた。

「ええっ! 蘭ちゃんらと、園子ちゃんと真さんっちゆう人と、アタシと平次の六人で行くっ?」

「う、うん……」

「蘭ちゃんはどうない思ふんや? 六人で行くこと」

「私は、六人で行つたら、楽しいと思うよ? でも、和葉ちゃんたちの予定や、真さんの予定もあるだろうし……それにっ! 新一に一回断られてるのに、もう一回誘つて、来てくれるかどうか、分かんないし……」

アタシは蘭ちゃんの言うことは最もやと思ひながら、やっぱり蘭ち

「やんはええ娘やな、と思った。ちゃんと皆のこと、考えてるんや、と。」

「なあ、蘭ちゃん。アタシに任せといてんか？ アタシと平次はいつでも行けるし、工藤君連れ出すんやったら、ええ考えがあるんや！」

『ほ、本当？ 新一、結構手ごわいよ？』

「大丈夫やって、平次使たら！」

『服部君を、使う？』

「そや。せやから、蘭ちゃんは何もせんと待っとってや！」

『う、うん……』

その後、しばらく話してから電話を切った。

「まずは、平次からや！」

file 3：西への電話（後書き）

遠山和葉 新大学一年生

服部平次 新大学一年生、探偵

この二人は、まだくっついていません（ワラ）

これからくっけようかと……（^。^；）

この作品の時間軸は……

・十二月にコナンが元の姿、工藤新一に戻る。
・旅行は、卒業し、大学も決まった三月。
です。

まあ、あまり深くは考えないでくださいっ！

面倒なことになっちゃうから……（ワラ）

では、file 4は和葉ちゃんと平次の会話、西の服部と東の工藤、
二人の探偵の会話です！

よろしくお願いします

ではゞ（^ー^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2881ba/>

memory ~ 失われた記憶 ~

2012年1月13日15時54分発行